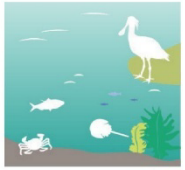
資料1

令和7年度
博多湾の環境保全に向けて講じた措置
およびモニタリング調査結果の概要

第3次博多湾環境保全計画　施策体系

基本的方向（博多湾の多面的機能）	令和16年度計画目標像	主な施策（黒字：既存、★印：新規）	指標・目標等		実施主体 関係者
1 ささえる  多様な生きものや市民生活を支える博多湾	豊かな海の実現に向けた適切な水質保全が行われている	・下水の高度処理 ・合流式下水道の改善 ・底質改善 ★博多湾の栄養塩類のあり方検討	・水質 COD T-N T-P	・環境基準達成状況　現状維持 ⇒※二次計画期間内の最低達成率以上 COD　2/8地点 T-N　2/3海域 T-P　全3海域	・行政 ・大学等 ・市民 ・NPO等市民団体 ・事業者 （水産関係者等）
	港湾機能、漁業活動と調和している	・浚渫土砂を有効活用した窪地埋め戻し ★浚渫土砂を有効活用した覆砂・浅場造成の検討・実施	・博多湾海域における魚種数	・現状維持 69種	
2 はぐくむ  多様な生きものを育み、恵みをもたらす博多湾	多様な生きものが生まれ育つ場が保全・再生・回復している	・藻場の保全・再生 ・干潟保全活動の推進 ・浚渫土砂を有効活用した窪地埋め戻し（再掲） ★浚渫土砂を有効活用した覆砂・浅場造成の検討・実施（再掲） ・底質改善（再掲）	・博多湾の藻場面積	・現状維持 ⇒R5博多湾藻場分布調査の面積（419.4ha）	・行政 ・大学等 ・市民 ・NPO等市民団体 ・事業者 （水産関係者等）
			・海藻類の種数（志賀島、能古島、今津）	・現状維持 ⇒※二次計画期間内の最少種数以上 今　津　54種 能古島　47種 志賀島　54種	
			・博多湾海域における魚種数（再掲）	・現状維持 69種	
	多種多様な水産資源が持続的に漁獲されている	・アサリ等資源再生活動 ・種苗放流 ・海藻養殖漁場の栄養塩類対策の検討	・室見川河口干潟のアサリ推定資源量 ・一人当たり漁業生産量 ・ノリ養殖生産量	※福岡市水産業総合計画に定める目標に準ずる ・室見川河口干潟のアサリ推定資源量　136トン ・一人当たり漁業生産量 8.88トン ・ノリ養殖生産量 187トン	
3 ふれあう  市民が身近にふれあう博多湾	市民の親水空間が良好な状態で保全されている	・ラブアース・クリーンアップ ・海浜地の清掃 ・アオサ回収 ・砂浜海浜の維持管理	・ラブアース・クリーンアップ参加者数	・現状値より増加 ⇒R5年度（41,800人）よりも増加	・行政 ・大学等 ・市民 ・NPO等市民団体 ・事業者 （水産関係者、レジャー関係者等）
			・百道浜来客者数	・現状値より増加 ⇒R5年度（300万人）よりも増加	
			・水浴場水質	・全地点A以上	
4 つなぐ  豊かな恵み・ふれあいを未来につなぐ博多湾	森里川海のつながりを意識した取組みが進んでいる	・環境保全創造活動の推進 ・環境保全に関する情報発信 ・ラブアース・クリーンアップ（再掲） ・小学生を対象とした環境学習	・博多湾環境保全創造活動の開催数	・現状値より増加 ⇒R5年度（31回）よりも増加	・行政 ・大学等 ・市民 ・NPO等市民団体 ・事業者 （水産関係者、レジャー関係者等）
	多様な主体がそれぞれの強みを活かしながら博多湾の環境保全創造活動を行っている		・まもるーむ福岡における博多湾環境保全に関するイベント実施回数及び参加者数	・現状値より増加 ⇒R5年度（7回及び計148名）よりも増加	
	豊かな博多湾を未来につなげる取組みが進んでいる				

講じた措置の概要①

発生源負荷対策

（参照：資料2　p3～5）

○生活系排水対策として、公共下水道の整備を実施（下水道人口普及率99.7%）　ささえる
・下水道処理区域面積：17,230ha（前年度比29ha増）
・下水道処理区域内人口：1,660,890人（前年度比4,950人増）

○分流化による合流式下水道の改善を博多駅周辺地区および天神周辺地区で実施　ささえる
・累計約355ha

河川などでの対策

（参照：資料2　p6、7、85）

○那珂川、御笠川、博多川の3河川で、52トンの浮遊ごみを回収　ささえる

○室見川水系の一斉清掃を実施（参加申込人員3,353人）　ささえる　つなぐ

沿岸漁業の振興

（参照：資料2　p50）

○アサリ等資源再生事業、環境・生態系保全活動支援事業等を実施　はぐくむ

底質の改善

（参照：資料2　p10、53）

○海底ごみ処理（95m^3）、海底耕うん（25回）を実施　ささえる　はぐくむ

○和白海域で海底耕うん（シーブルー事業）による底質改善（6ha）を実施　ささえる　はぐくむ

浚渫土砂の有効活用

（参照：資料2　p10、52）

○浚渫土砂を有効活用した窪地の埋戻し、覆砂・浅場造成の検討・実施　ささえる　はぐくむ

講じた措置の概要②

浮遊ごみの回収等

（参照：資料2　p79、80、86）

○ラブアース・クリーンアップ事業　ふれあう　つなぐ
市内5会場にて一斉清掃を実施し、6月中に実施した地域、企業、団体へ
ごみ袋の配布と収集の支援を実施（参加団体：543団体、参加人数：38,575名）

○臨港道路等の清掃により、219トンのごみを回収　ふれあう
清掃船等による海面清掃により、海面ごみ35トンを回収

干潟保全活動の推進

（参照：資料2　p51、52、86）

○和白干潟保全のつどい　はぐくむ　つなぐ
和白干潟を中心に活動する市民団体等との定期的な意見交換、環境保全活動の企画・実施

○里海保全再生事業として、カブトガニ卵塊幼生調査、市民団体等との共働による　はぐくむ　つなぐ
里海保全活動等を実施

○市民参加による和白干潟生物調査を実施　はぐくむ　つなぐ

親水空間の整備等

（参照：資料2　p52、80）

○エコパークゾーンの水域利用に関する住環境及び自然環境に配慮した自主ルールを策定し実践　はぐくむ　ふれあう

○アイランドシティはばたき公園において、生きもの講座や自然環境の保全活動等を開催　ふれあう

環境保全創造の推進

（参照：資料2　p85、86）

○森里川海それぞれの役割やつながりの大切さを学ぶ体験活動を実施　つなぐ

○博多湾NEXT会議において、アマモ場づくりを中心に、イベントの実施や　つなぐ
博多湾の生き物図鑑の活用等による魅力発信等を実施

ささえる　計画目標像、指標・目標等

＜計画目標像＞

・豊かな海の実現に向けた適切な水質保全が行われている
・港湾機能、漁業活動と調和している

＜指標・目標等＞

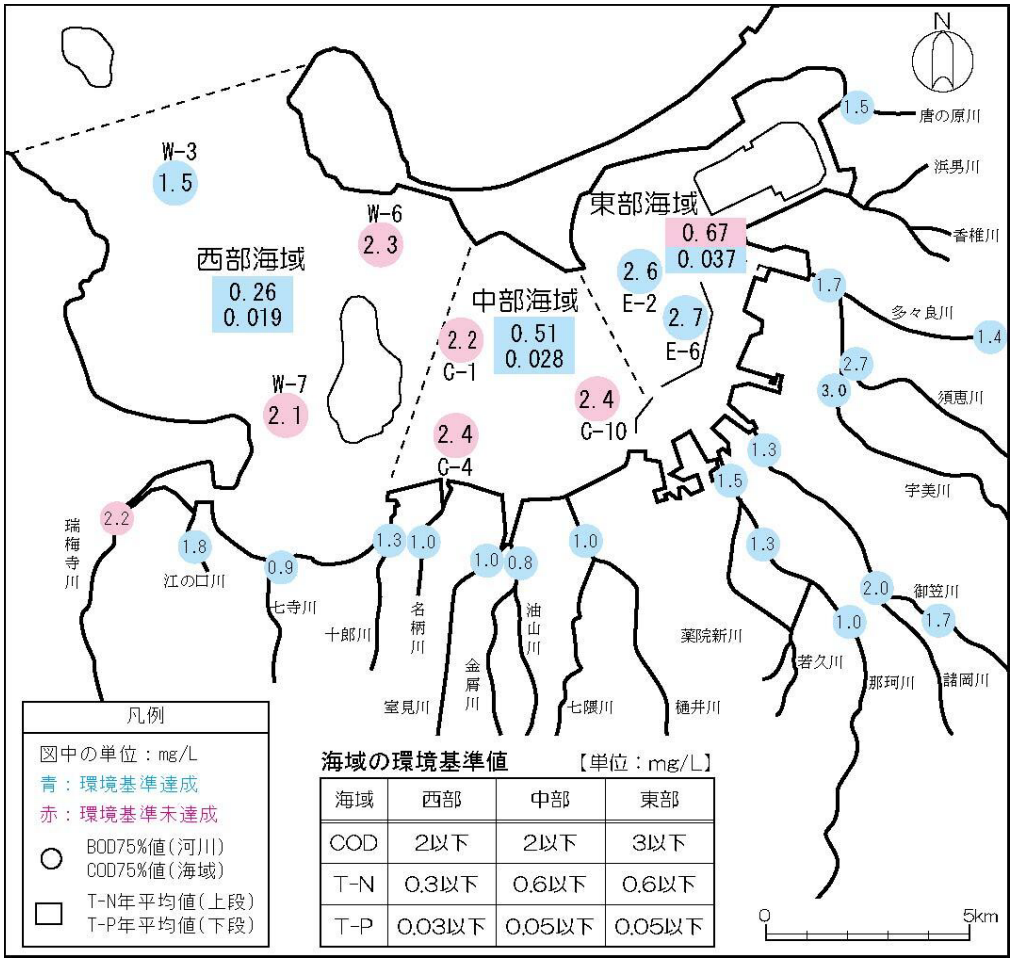
指標・目標		モニタリング内容	令和７年度
・水質 COD T-N T-P	・環境基準達成状況　現状維持 ⇒※H28～R5 年度の最低達成率以上 COD　2/8 地点以上 T-N　2/3 海域以上 T-P　全 3 海域	①公共用水域水質調査 ②貧酸素発生状況調査 （底生生物、底質含む） ③赤潮発生状況調査 ④博多湾魚類調査 ⑤浚渫土砂有効活用施工箇所における調査	・環境基準達成状況 COD　3/8地点 T-N　2/3海域 T-P　全３海域
・博多湾海域における魚種数	・現状維持　69 種		・博多湾海域における魚種数　102種
参考項目			
・水質（無機態 N・P、N/P 比） ・底層 DO ・底質 ・底生生物 ・赤潮発生件数・日数 ・浚渫土砂有効活用施工箇所における底生生物・底質等			

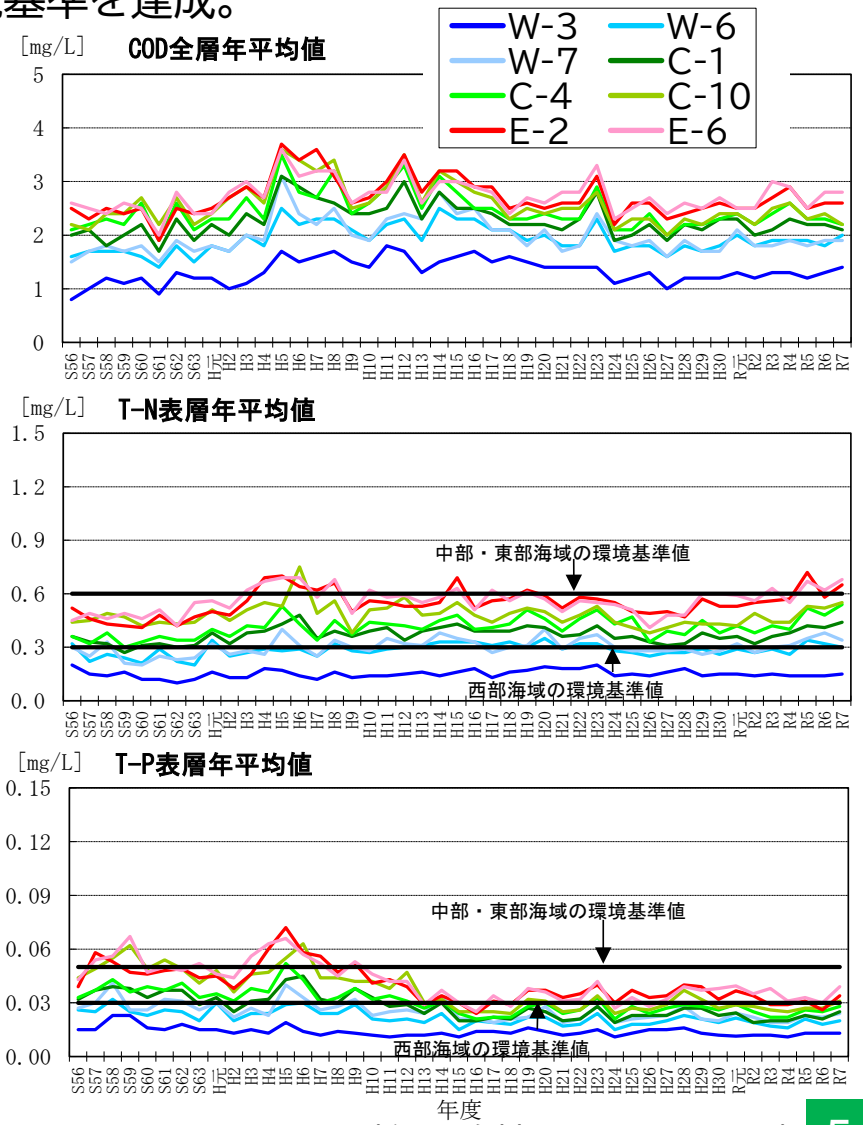
（参照：資料2　p3～48）

ささえる　公共用水域水質調査

○博多湾のCODは、環境基準点8地点中3地点で環境基準を達成。
○博多湾の全窒素は3海域中2海域で、全リンはすべての海域で環境基準を達成。
○河川のBODは、環境基準点19地点中18地点で環境基準を達成。

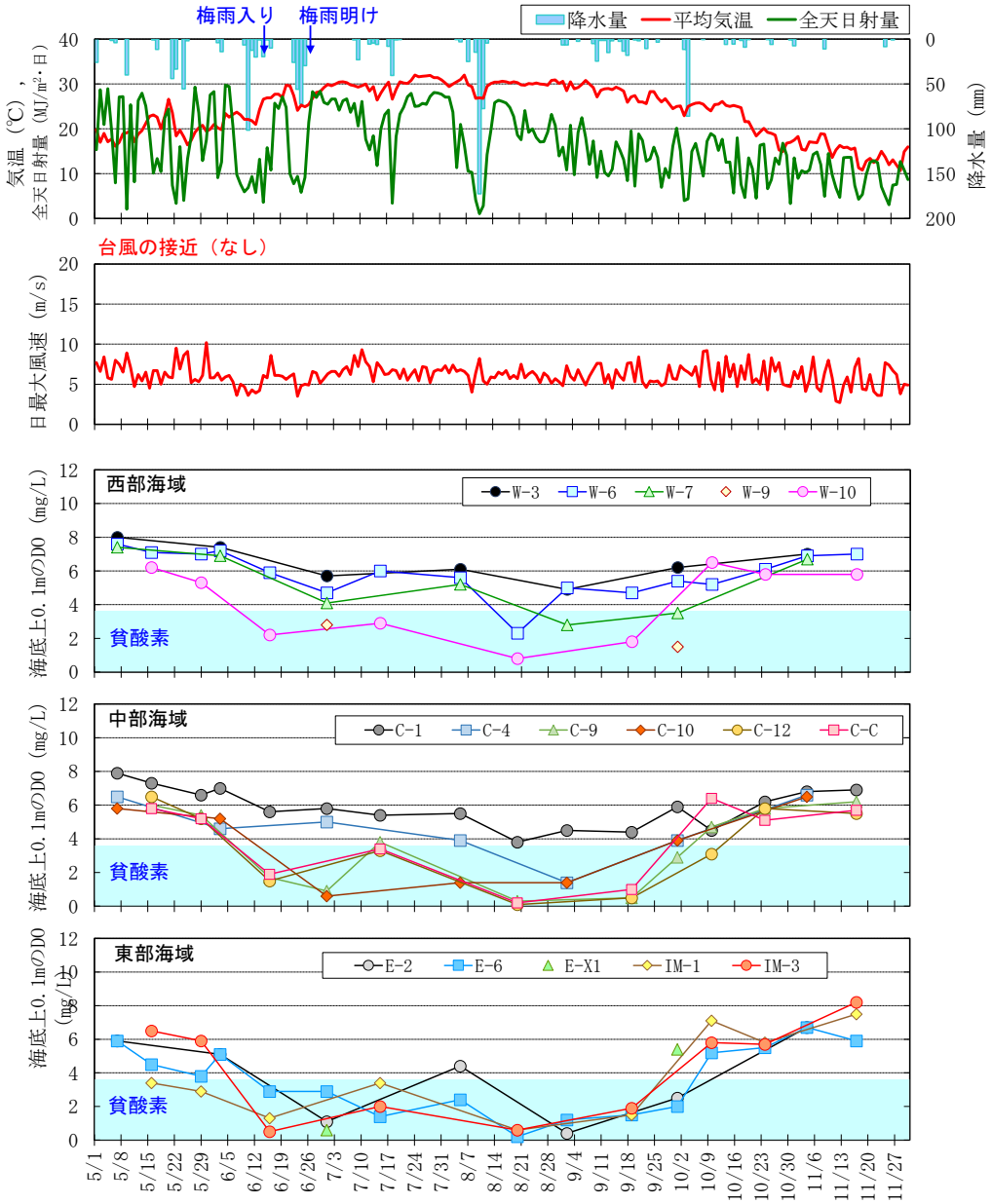
［博多湾のCOD、T-N、T-Pおよび流入河川のBODの環境基準達成状況］





（参照：資料2　p11～17、48）

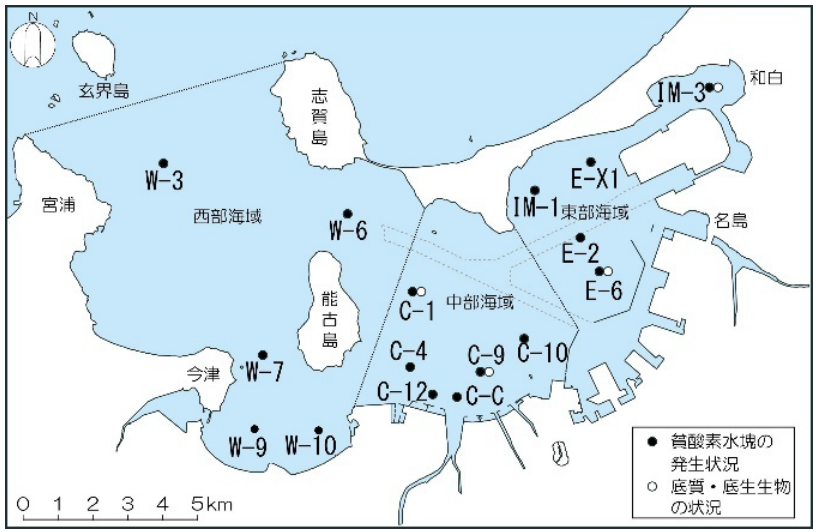
ささえる　貧酸素発生状況調査（水質）



［海底上0.1mのDOの経時変化］

○貧酸素水塊の発生地点数は16地点中14地点であった。

○一部の地点では底層のDOが1mg/Lを下回る、あるいはそれに近い濃度となる期間が例年と比べて長かった。



［調査地点］

（参照：資料2　p18、20～26）

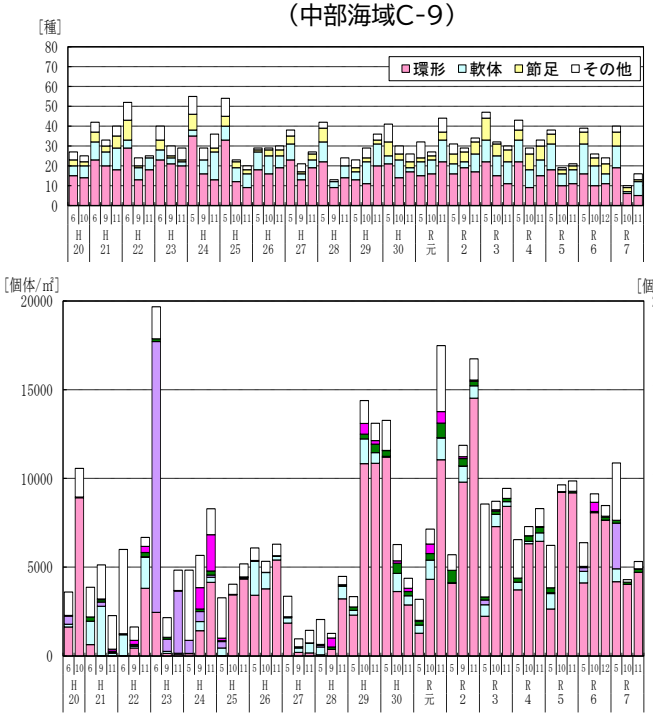
ささえる　貧酸素発生状況調査（底生生物）

○貧酸素水塊の発生による底生生物への影響

貧酸素水塊発生前（5月）、解消直後（10月上旬）、解消後（11月中旬）の底生生物の種数、個体数、湿重量は、解消後において直近5か年よりも少なめであった。

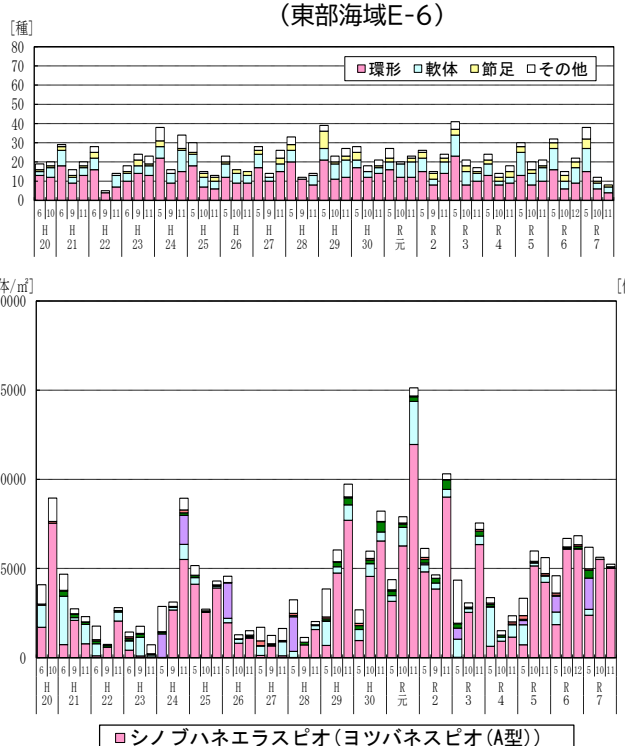
貧酸素水塊継続的発生

（中部海域C-9）



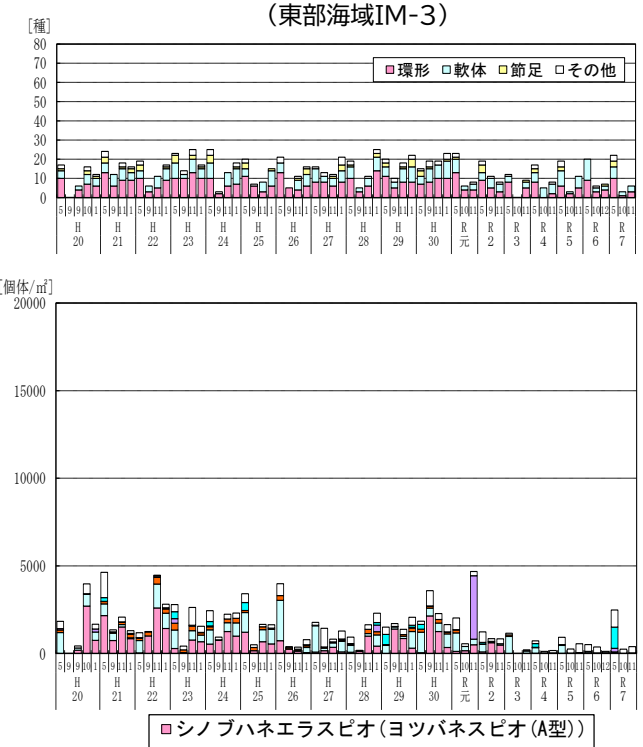
貧酸素水塊継続的発生

（東部海域E-6）



貧酸素水塊継続的発生

（東部海域IM-3）



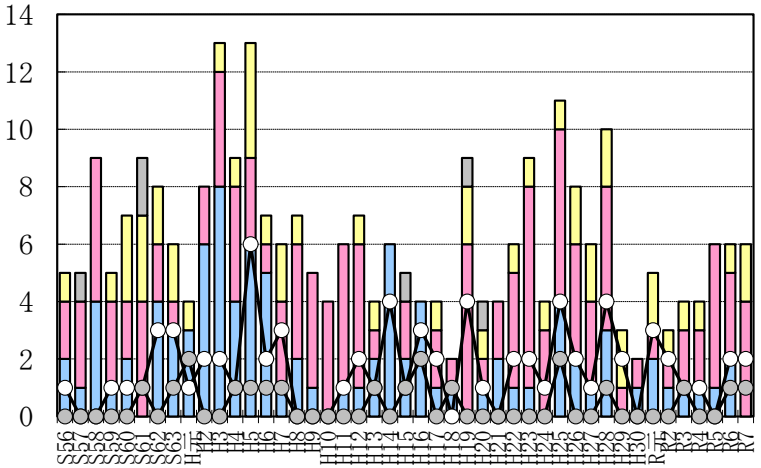
［底生生物の種数・個体数の経時変化］

（参照：資料2　p19、27～38）

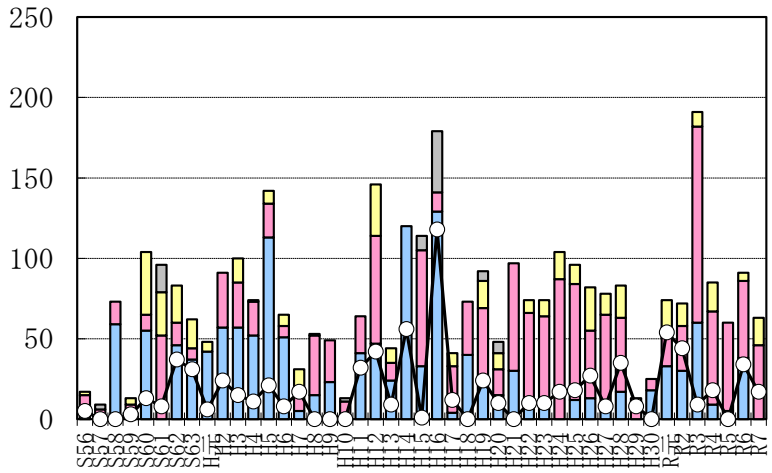
ささえる　赤潮発生状況調査

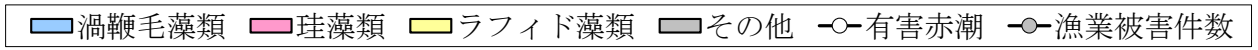
〇令和7年度の赤潮の類別発生件数は6件、類別発生日数は延べ63日間。漁業被害は1件。
〇赤潮の類別発生件数、類別発生日数は年による増減が大きく、経年的には概ね横ばい傾向。

［件］**赤潮の類別発生件数**



［日］**赤潮の類別発生日数**





【参考】

発生月	発生期間	構成プランクトン
5月	5/15～5/20　（6日間）	珪藻　*Skeletonema* spp.　*Chaetoceros* spp.
5月	5/29～6/2　（5日間）	珪藻　*Skeletonema* spp.
6月	6/9～6/18　（10日間） ※漁業被害あり	ラフィド藻　*Heterosigma akashiwo*
8月	8/13～8/19　（7日間）	珪藻　*Chaetoceros* spp.
9月	9/3～9/30　（28日間）	珪藻　*Leptocylindrus* spp.　*Pseudo-nitzschia* spp.
11月	11/25～12/1（7日間）	ラフィド藻　*Heterosigma akashiwo*

（出典：水産庁九州漁業調整事務所HP）

（参照：資料2　p39）

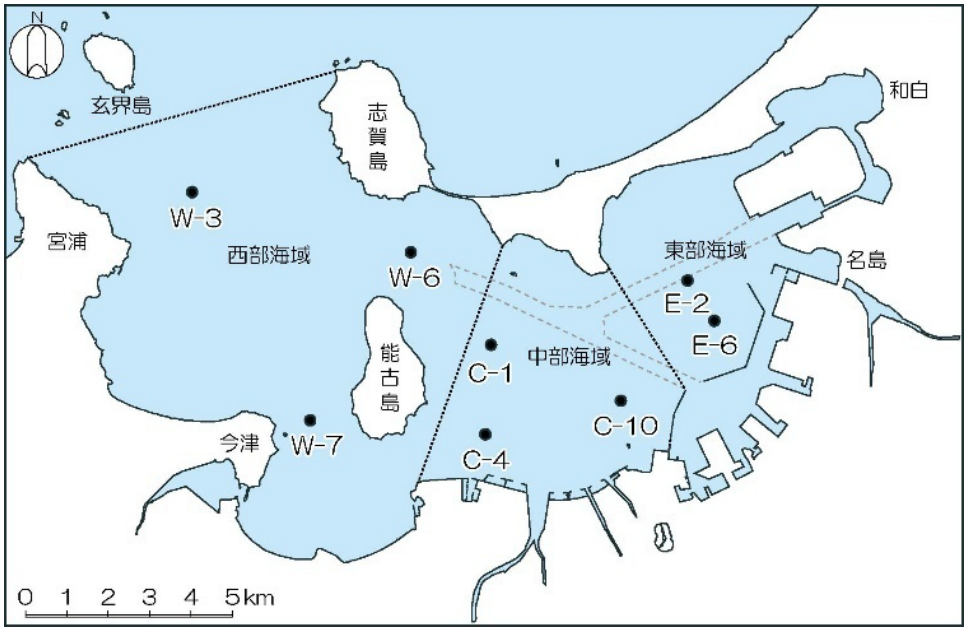
ささえる　博多湾魚類調査

〇博多湾の環境基準点8地点で確認された魚数は、累計102種であった。
（調査結果の詳細は、資料2　p105、106「博多湾における環境DNAを用いた魚類のモニタリング」を参照。）

各月検出種数

調査月	5月		8月		11月		2月	
年度	R6	R7	R6	R7	R6	R7	R6	R7
表層	21	25	16	46	18	41	10	25
底層	23	41	42	50	20	41	14	38
計	35	46	48	70	32	55	14	44

※表層・底層で重複した種は1種とカウントした

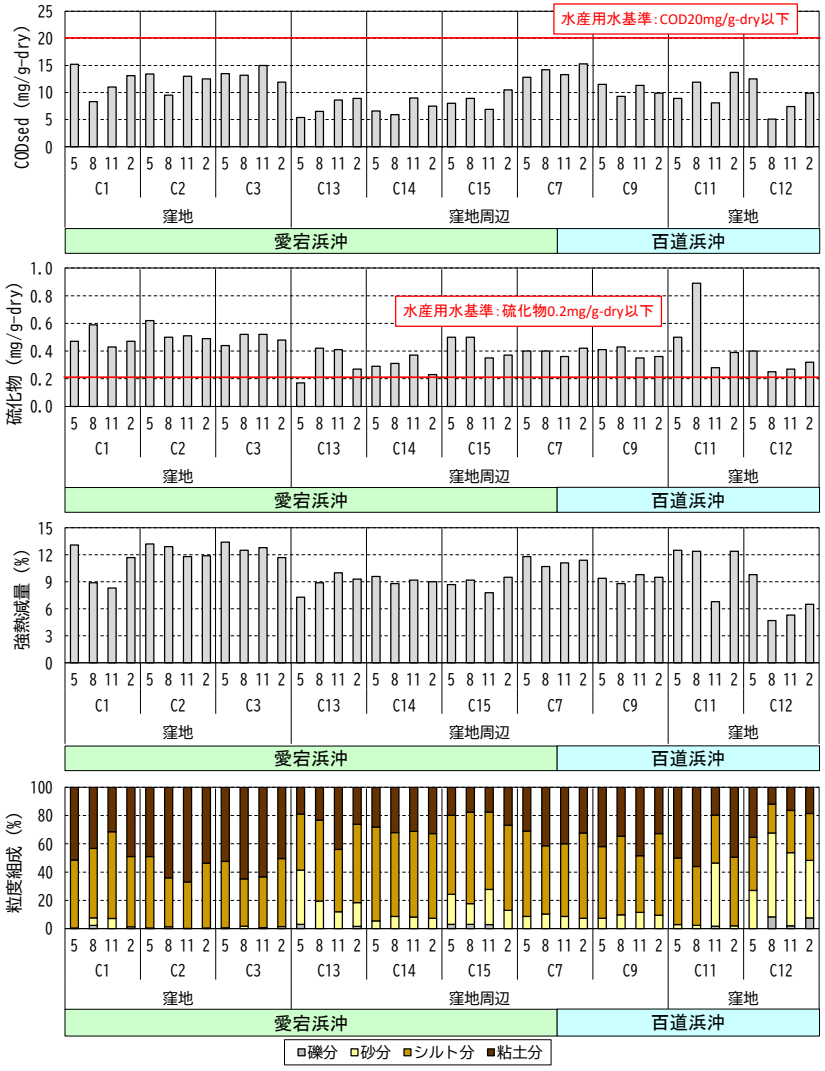


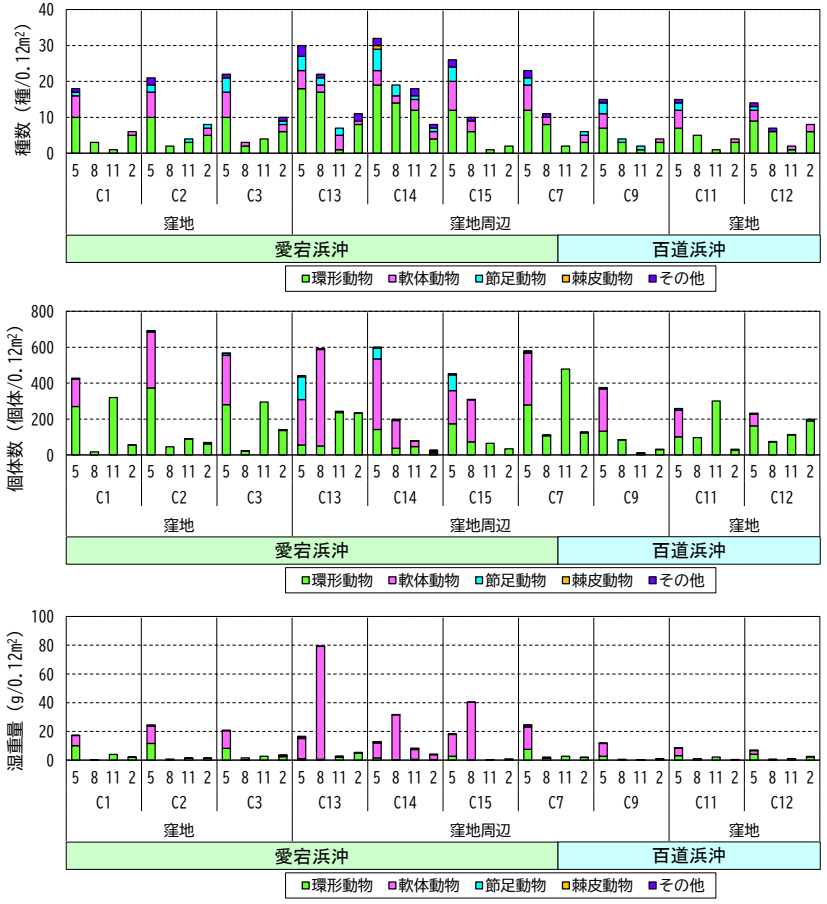
［調査地点］

（参照：資料2　p40、105、106）

ささえる　浚渫土砂有効活用施工箇所における調査（窪地の埋め戻し）

○百道浜沖窪地（C11、C12）周辺では、令和2年から小規模な覆砂が継続して行われているため、底質の性状がまばらとなっている可能性がある。両地点とも粘土・シルト分の減少に伴って底質中の有機物（COD、強熱減量）も減少し、硫化物も同時期に大きく減少していた。
○種数、個体数は5月が最も多い傾向にあり、湿重量は軟体動物の個体数が多いと大きくなっていた。

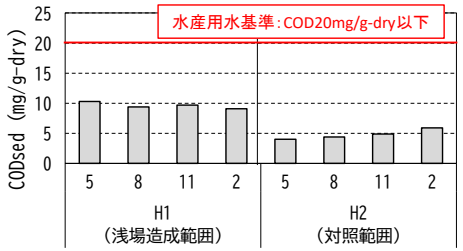


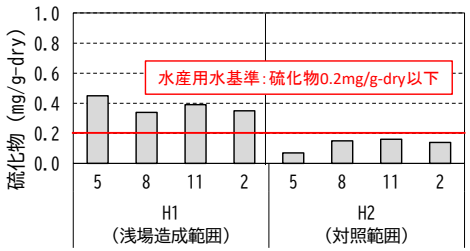


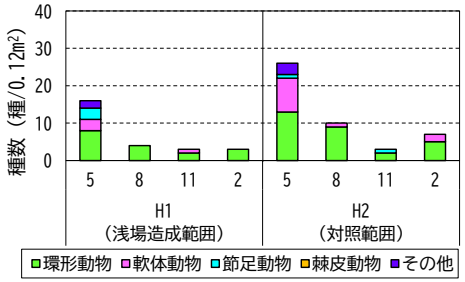
（参照：資料2　p41～44）

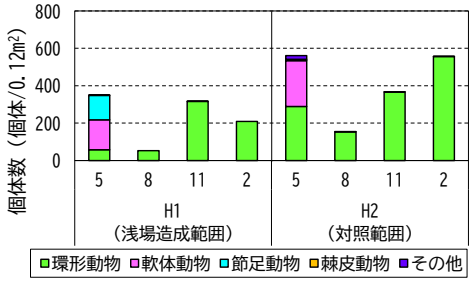
ささえる　浚渫土砂有効活用施工箇所における調査（浅場造成）

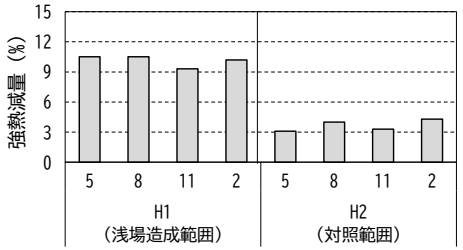
○令和7年度は浅場造成以前の初期条件の把握を目的として実施。
○底質のCOD、硫化物、強熱減量、粒度組成のいずれも目立った季節変化はみられていない。
　水産用水基準と比較すると、CODは両地点ともに下回り、硫化物は浅場造成箇所H1では上回り、対象範囲のH2では下回っていた。
　なお、対象範囲H2では、令和6年5月には浅場造成箇所H1と大きな違いはみられなかったが、令和6年8月に粒度組成で砂分の増加に伴って、COD、硫化物、強熱減量が減少していた。
○底生生物の種数は、5月が最も多かった。
　個体数は、浅場造成箇所H1の5月が軟体動物、対象範囲H2の5月が環形動物門と軟体動物門が多く、その他の季節は環形動物門が多かった。
　湿重量はいずれの地点も軟体動物門の個体数が多いと大きくなっていた。

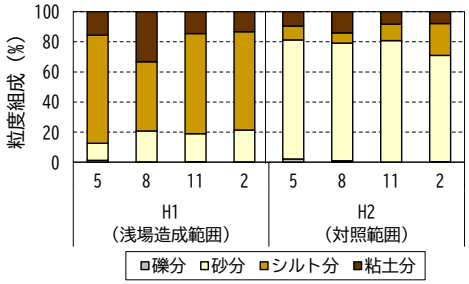


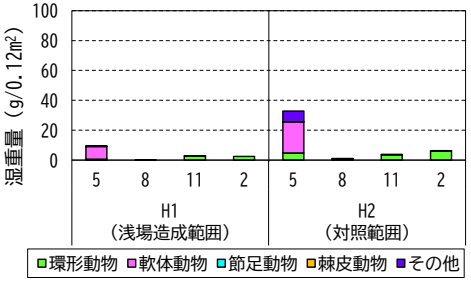












（参照：資料2　p45～47）

はぐくむ　計画目標像、指標・目標等

＜計画目標像＞

・多様な生きものが生まれ育つ場が保全・再生・回復している
・多種多様な水産資源が持続的に漁獲されている

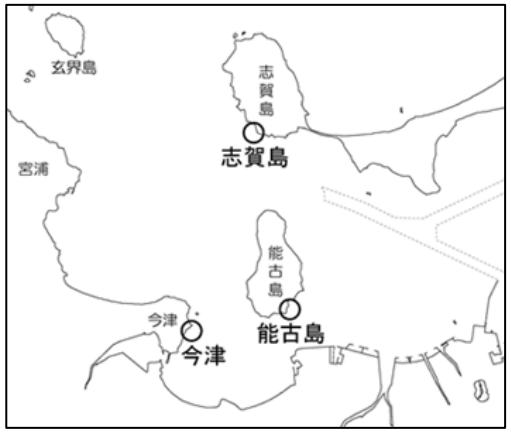
＜指標・目標等＞

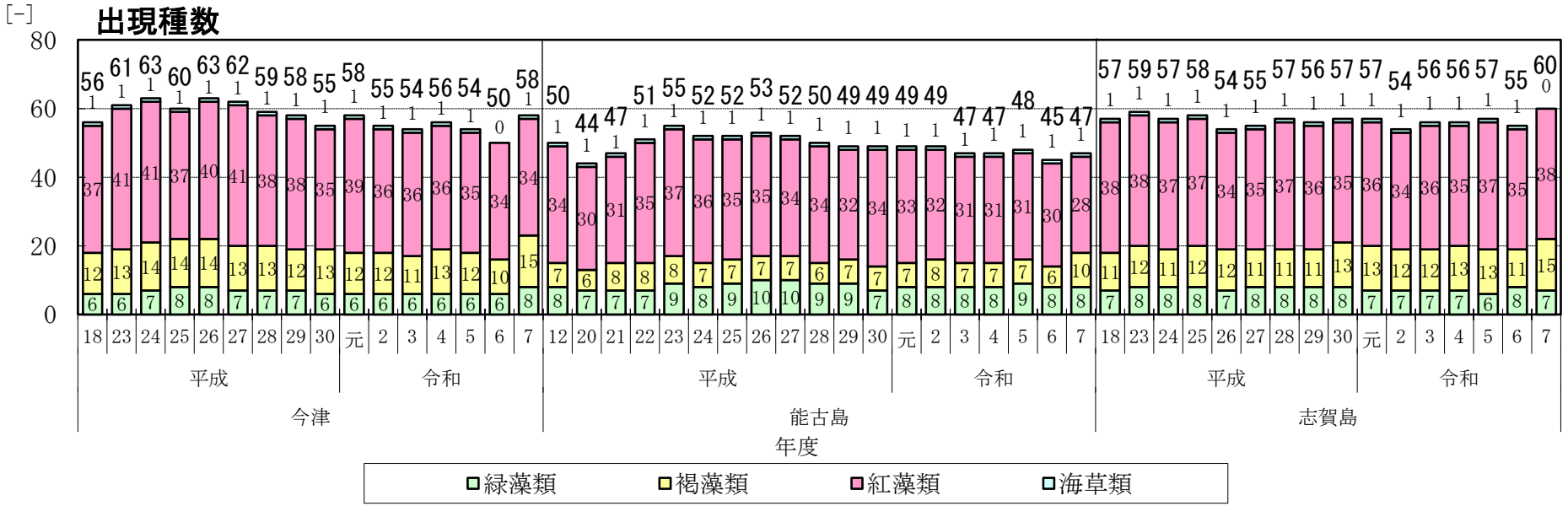
指標・目標		モニタリング内容・実績値把握	令和７年度
・博多湾の藻場面積	・現状維持 ⇒R5 博多湾藻場分布調査の面積（419.4ha）	［モニタリング内容］ ①博多湾藻場分布調査 ②海藻種数調査 ③和白干潟での干潟生物調査 ④今津干潟でのカブトガニ産卵・幼生調査 ⑤博多湾でのカブトガニ成体・亜成体調査 ⑥博多湾鳥類調査 ⑦アサリ資源量調査 ⑧博多湾魚類調査（再掲） ⑨浚渫土砂有効活用施工箇所における調査（再掲） ［実績値把握］ ①鳥類（環境省モニタリングサイト 1000） ②漁業・養殖生産量	・博多湾の藻場面積 （調査なし）
・海藻類の種数 （志賀島、能古島、今津）	・現状維持 ⇒※H28～R5 年度の最少種数以上 今　津　54 種 能古島　47 種 志賀島　54 種		・海藻類の種数 今　津　58種 能古島　47種 志賀島　60種
	※福岡市水産業総合計画に定める目標に準ずる		
・室見川河口干潟のアサリ推定資源量	・室見川河口干潟のアサリ推定資源量　136 トン		・室見川河口干潟のアサリ推定資源量（５月）10.6トン （10月）89.0トン
・一人当たり漁業生産量	・一人当たり漁業生産量 8.88 トン		・一人当たりの漁業生産量 5.10トン （R6確定値）
・ノリ養殖生産量	・ノリ養殖生産量　187 トン		・ノリ養殖生産量　156トン （R6確定値）
・博多湾海域における魚種数（再掲）	・現状維持　69 種		・博多湾海域における魚種数　102種
参考項目			
・博多湾の鳥類の種数・個体数 ・和白干潟の干潟生物（種数、個体数、湿重量） ・カブトガニの産卵状況、幼生・亜成体・成体の生息状況 ・漁業・養殖生産量 ・浚渫土砂有効活用施工箇所における底生生物・底質等（再掲）			

（参照:資料2　p49～77）

はぐくむ　海藻類種数調査

○令和7年度における海藻類の種数は、今津が58種、能古島が47種、志賀島が60種であり、現状値（今津：54種、能古島：47種、志賀島：54種）以上であった。
○いずれの場所も海藻類の種数に大きな変化はみられていない
○海草類のアマモは今津と能古島で確認された。

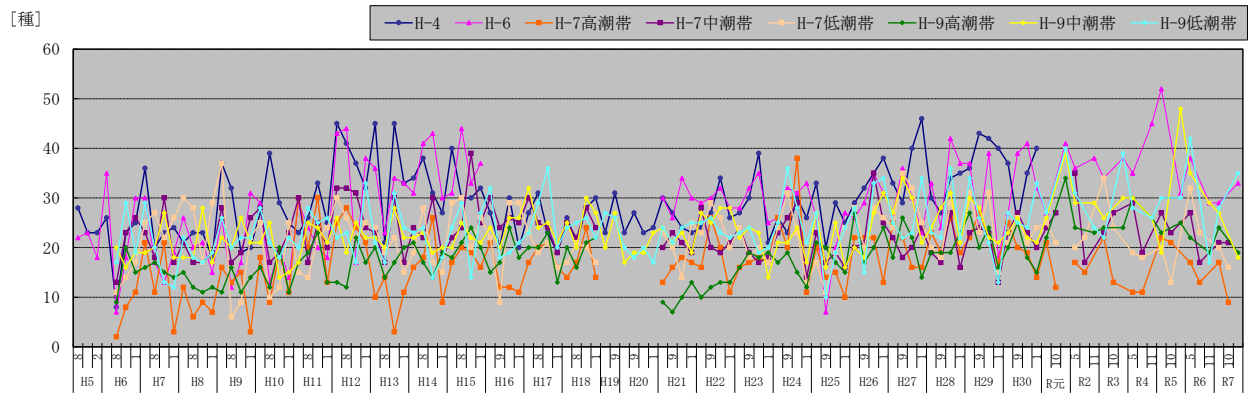




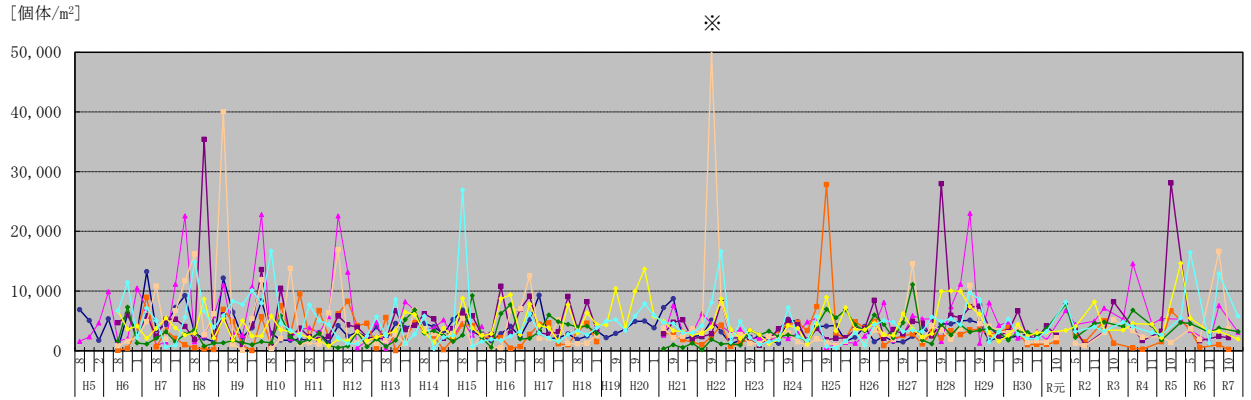
（参照：資料2　p54、77）

和白干潟での干潟生物調査

種数

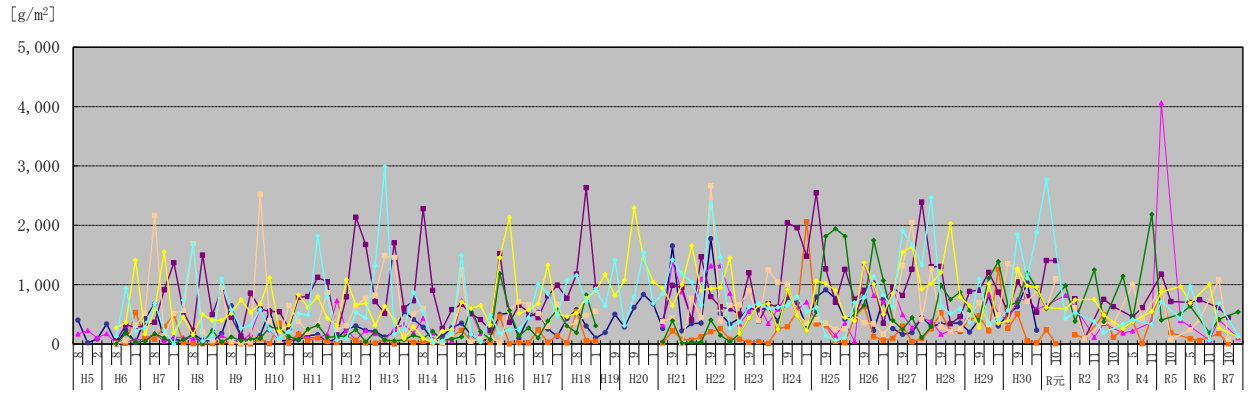


個体数



※：ホトトギスガイ 約33,000個体/m²、ウミニナ 約14,000個体/m²

湿重量



○和白干潟の干潟生物は
- ・種数9～35種
- ・個体数 約230～17,000個体/m²
- ・湿重量 約2.8～1,100g/m²

であり、例年と同程度であった。

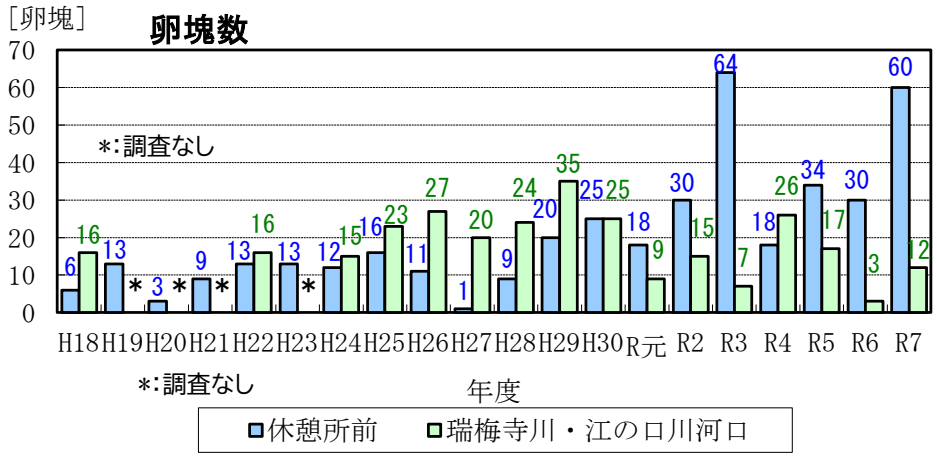
○優占種は、
個体数では、
ウミニナ、コケゴカイ、アリアケドロクダムシ
湿重量では、
ウミニナ、アサリなど
であり、いずれの種も内湾・干潟域に多産する種であった。

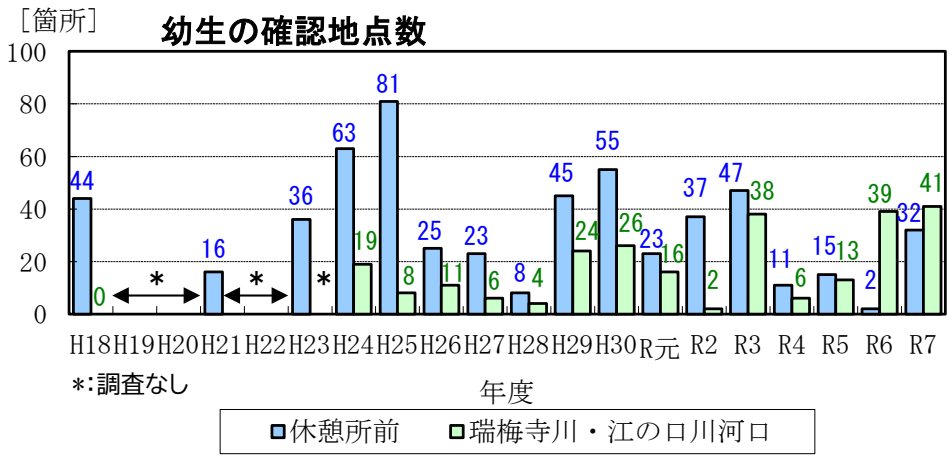
（参照：資料2　p55、56）

はぐくむ　今津干潟でのカブトガニの産卵・幼生調査



○主要な産卵場である休憩所前の卵塊数は60卵塊、瑞梅寺川・江の口川河口では12卵塊
○休憩所前の幼生確認地点数は32箇所、瑞梅寺川・江の口川河口では41箇所

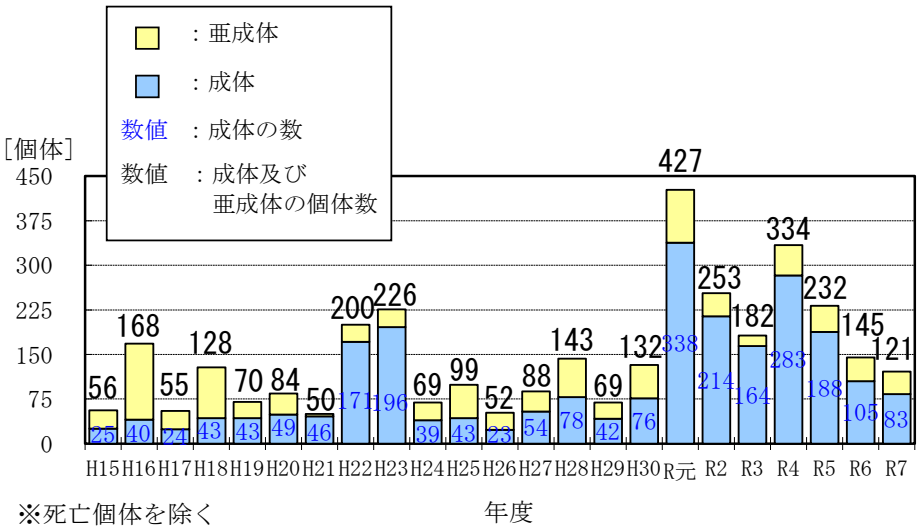




（参照:資料2　p57、58）

博多湾でのカブトガニの亜成体・成体調査（標識調査）

○カブトガニの亜成体及び成体の捕獲個体数は121個体であった。
○捕獲個体数は亜成体・成体で構成されており、連続した世代が確認されている。



カブトガニ捕獲個体数の経年変化

亜成体・成体の年齢別出現状況（前体幅と歳との関係より年齢を推定）

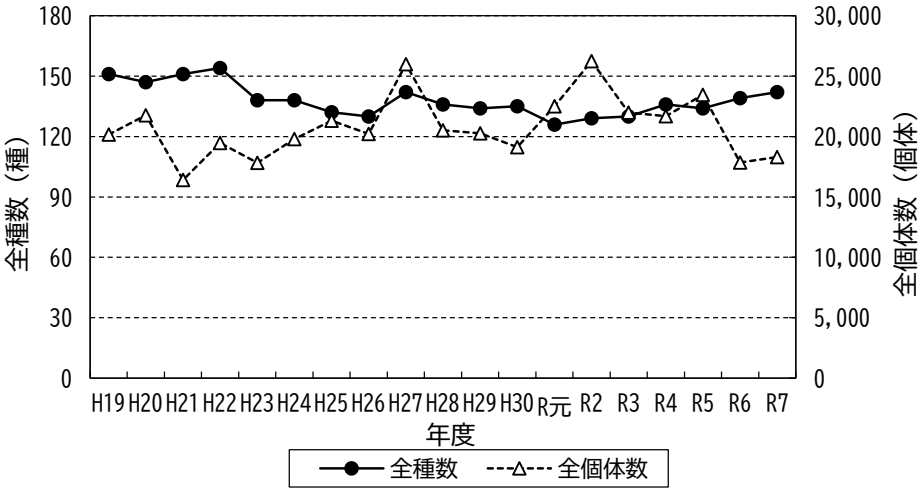
単位：個体

前体幅(cm)	9	11	13	15	17	19	21	23	28		合計
15年度						2	4	20	5		31
16年度						1	4	21	2		28
17年度							5	12			17
18年度	2	6	7	16	15	30	13	34	7		130
19年度		1	1	3	1	18	9	36	4		73
20年度		1	2	4	3	9	9	47	10		85
21年度	1					1	9	34	9		54
22年度	2	2	2	3	2	10	23	118	39		201
23年度		1		5	3	8	20	145	44		226
24年度		1		12	1	3	6	38	19		80
25年度	2	2	2	3	8	17	12	45	18		109
26年度	1	6	4	11		4	5	16	5		52
27年度				9		7	18	46	9		89
28年度		4	3	13	4	24	15	72	8		143
29年度	1	2	1	1		9	11	37	6		68
30年度		5	1	6	3	9	21	70	17		132
R元年度			1	14	9	38	56	262	47		427
R2年度		1		1	4	13	24	150	60		253
R3年度					1	5	20	113	43		182
R4年度	1	1		12	2	13	31	202	72		334
R5年度		2	2	9	2	4	25	134	54		232
R6年度				2	1	8	21	82	31		145
R7年度			1	10	4	9	10	70	17		121
推定による年齢(歳)と世代	7	8	9	10	11	12	13	14	15		
	亜成体世代						成体世代				

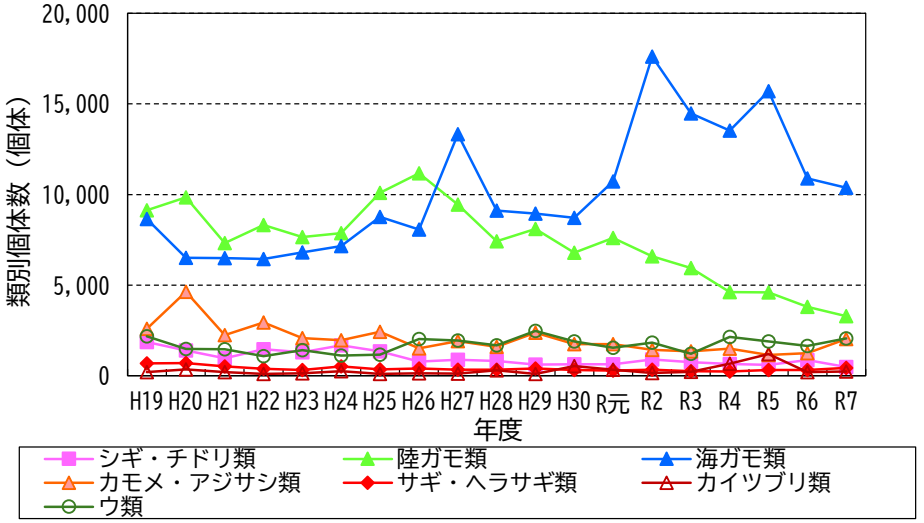
（参照：資料2　p59～61）

博多湾鳥類調査

○全種数、全個体数は、ほぼ横ばいで推移しており、令和7年度は過年度の範囲内であった。
○類別個体数は、シギ・チドリ類と陸ガモ類が減少傾向で推移している。令和7年度のシギ・チドリ類は過年度の範囲内であり、陸ガモ類は過年度を下回った。
海ガモ類は変動が大きいが、平成25年度以降やや増加傾向が続いており、令和7年度は過年度の範囲内であった。



全種数、全個体数の経年変化



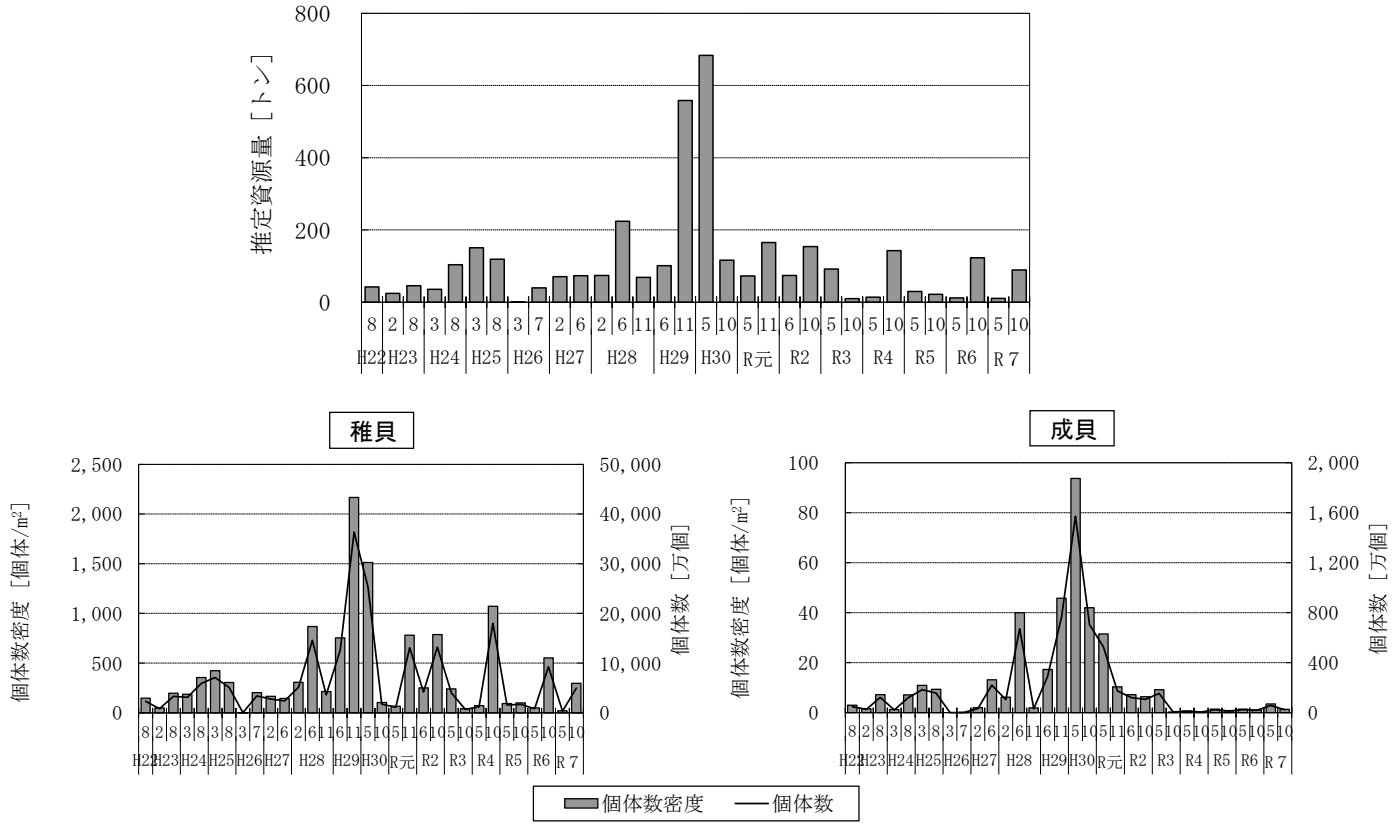
類別個体数の経年変化

（参照：資料2　p62、63）

干潟域　アサリ資源量調査（稚貝・成貝の生息状況）

○令和7年度の室見川河口干潟におけるアサリ推定資源量は、5月が10.6トン、10月が89.0トンであり、目標値（136トン　※福岡市水産業総合計画に定める目標）を下回った。

○平成30年7月の大雨により、稚貝・成貝が減少し、稚貝は増減を繰り返しており、成貝は依然として少ない状況が続いている。



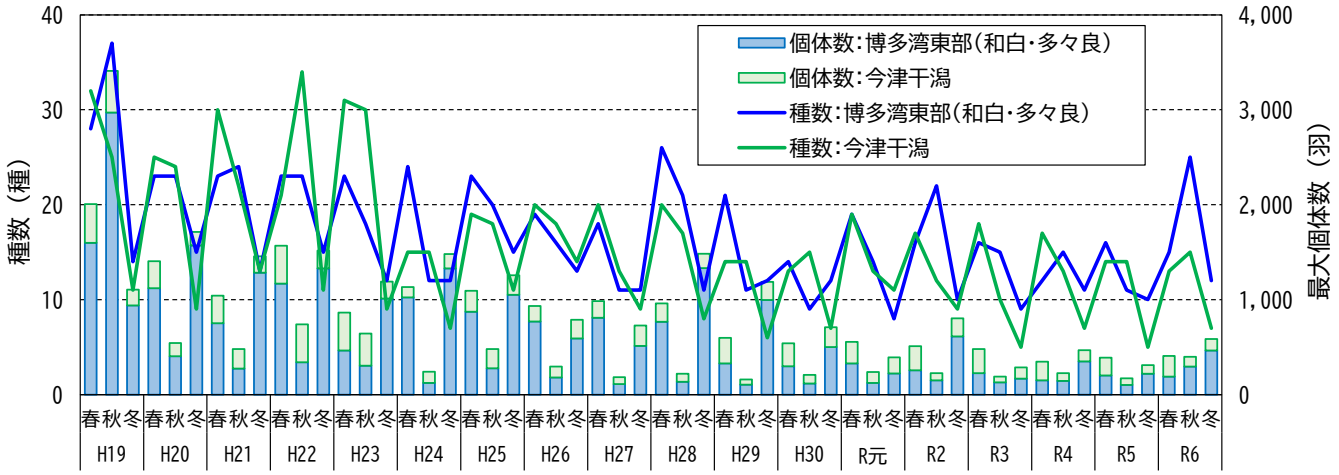
推定資源量（上段）、稚貝・成貝の個体数密度・個体数（下段）の推移（室見川河口干潟）

（参照：資料2　p64～72、77）

実績値把握

鳥類(環境省モニタリングサイト1000)

○博多湾東部(和白・多々良)、今津干潟における種数、個体数は、いずれも年変動を繰り返しながら、全体として減少傾向にあった。



データの出典)環境省生物多様性センターHP「モニタリングサイト1000」の「シギ・チドリ類調査報告書」

博多湾東部(和白・多々良)、今津干潟におけるシギ・チドリ類の種数、個体数

漁業・養殖生産量

○一人当たりの漁業生産量　　5.10トン(R6確定値、R7は集計中)
○ノリ養殖生産量　　156トン(R6確定値、R7は集計中)
[参考項目]漁業・養殖生産量　　2,171トン(R6確定値、R7は集計中)

(参照:資料2　p76)

ふれあう　計画目標像、指標・目標等

＜計画目標像＞

・市民の親水空間が良好な状態で保全されている

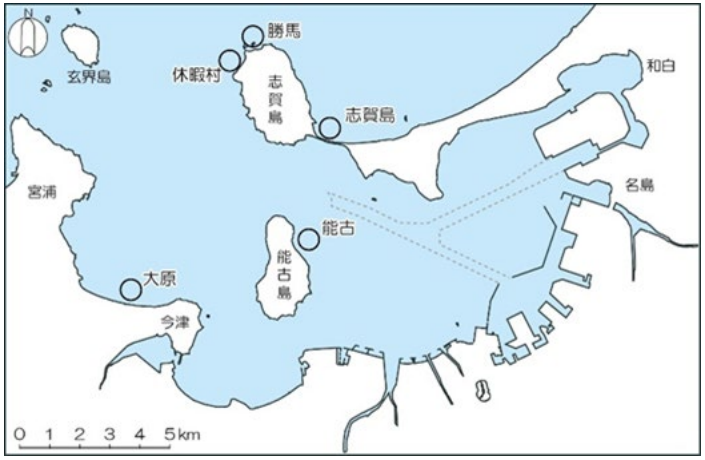
＜指標・目標等＞

指標・目標		モニタリング内容・実績値把握	令和７年度
・ラブアース・クリーンアップ参加者数	・現状値より増加 ⇒R5 年度(41,800 人)よりも増加	[モニタリング内容] ①水浴場水質等調査 [実績値把握] ①ラブアース・クリーンアップ参加者数 ②百道浜来客者数 ③ごみ回収量 （海浜地ごみ・海底ごみ等）	・ラブアース・クリーンアップ参加者数 38.575人
・百道浜来客者数	・現状値より増加 ⇒R5 年度(300 万人)よりも増加		・百道浜来客者数 297万人
・水浴場水質	・全地点 A 以上		・水浴場水質 （開設前）全地点A以上 （開設中）3/5地点A以上
参考項目			
・ごみ回収量			

（参照:資料2　p78～84）

水浴場等調査

○開設前は、全ての海水浴場で水質AAであった。
○開設中は、大原、能古海水浴場では水質Bとなったが、休暇村、勝馬、志賀島海水浴場では水質A以上であった。



＜開設前＞

水浴場名	調査月日	ふん便性大腸菌群数（個/100mL）	COD（mg/L）	透明度（m）	油膜	判定
休暇村	4月15日、5月8日	<2	1.5	>1.0	なし	水質AA
勝馬	4月15日、5月8日	<2	1.8	>1.0	なし	水質AA
志賀島	4月15日、5月8日	<2	1.4	>1.0	なし	水質AA
大原	4月15日、5月8日	<2	1.7	>1.0	なし	水質AA
能古	4月15日、5月8日	<2	1.8	>1.0	なし	水質AA

＜開設中＞

水浴場名	調査月日	ふん便性大腸菌群数（個/100mL）	COD（mg/L）	透明度（m）	油膜	判定
休暇村	7月22日	<2	1.6	>1.0	なし	水質AA
勝馬	7月22日	17	1.7	>1.0	なし	水質A
志賀島	7月22日	<2	1.6	>1.0	なし	水質AA
大原	7月22日	6	2.2	>1.0	なし	水質B
能古	7月22日	32	2.5	>1.0	なし	水質B

（参照：資料2　p61、62）

実績値把握

ラブアース・クリーンアップ参加者数

○令和7年度は、市内5会場にて一斉清掃を実施し、併せて6月中に実施した地域、企業、団体へごみ袋の配布と収集の支援を行い、38,575名が参加した。

百道浜来客者数

○百道浜来客数は297万人であった。

ごみ回収量（海浜地ごみ・海底ごみ等）

○海浜地ごみ回収量は267トン、海底ごみ回収量は0.2トンであった。

【参考】海洋ごみに関する措置の結果

措置	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7
清掃船等による浮遊ごみ回収	65t	115t	47t	43t	25t	36t	40t	34t	35t
海浜地清掃ごみ回収	454t	1,346t	451t	429t	465t	276t	391t	313t	267t
清掃船による河川ごみ回収	62t	61t	69t	60t	51t	51t	53t	57t	52t
漁業者による海底ごみ回収	372m^3	324m^3	294m^3	282m^3	120m^3	96m^3	102m^3	114m^3	95m^3
ラブアース・クリーンアップ	144t	137t	148t	－	－	110t	136t	84t	126t

（参照：資料2　p83）

つなぐ　計画目標像、指標・目標等

＜計画目標像＞

- 森里川海のつながりを意識した取組みが進んでいる
- 多様な主体がそれぞれの強みを活かしながら博多湾の環境保全創造活動を行っている
- 豊かな博多湾を未来につなげる取組みが進んでいる

＜指標・目標等＞

指標・目標		実績値把握	令和７年度
・博多湾環境保全創造活動の開催数	・現状値より増加 ⇒R5 年度（31 回）よりも増加	①博多湾環境保全創造活動の開催数 ②まもるーむ福岡における博多湾環境保全に関するイベント実施回数及び参加者数	・博多湾環境保全創造活動の開催数 36回
・まもるーむ福岡における博多湾環境保全に関するイベント実施回数及び参加者数	・現状値より増加 ⇒R5 年度（7 回及び計 148 名）よりも増加		・まもるーむ福岡における博多湾環境保全に関するイベント実施回数及び参加者数 8回及び163名

（参照:資料2　p85～88）

実績値把握

博多湾環境保全創造活動の開催数

○令和7年度の博多湾環境保全創造活動の開催数は、36回であった。

まもるーむ福岡における博多湾環境保全に関するイベント実施回数及び参加者数

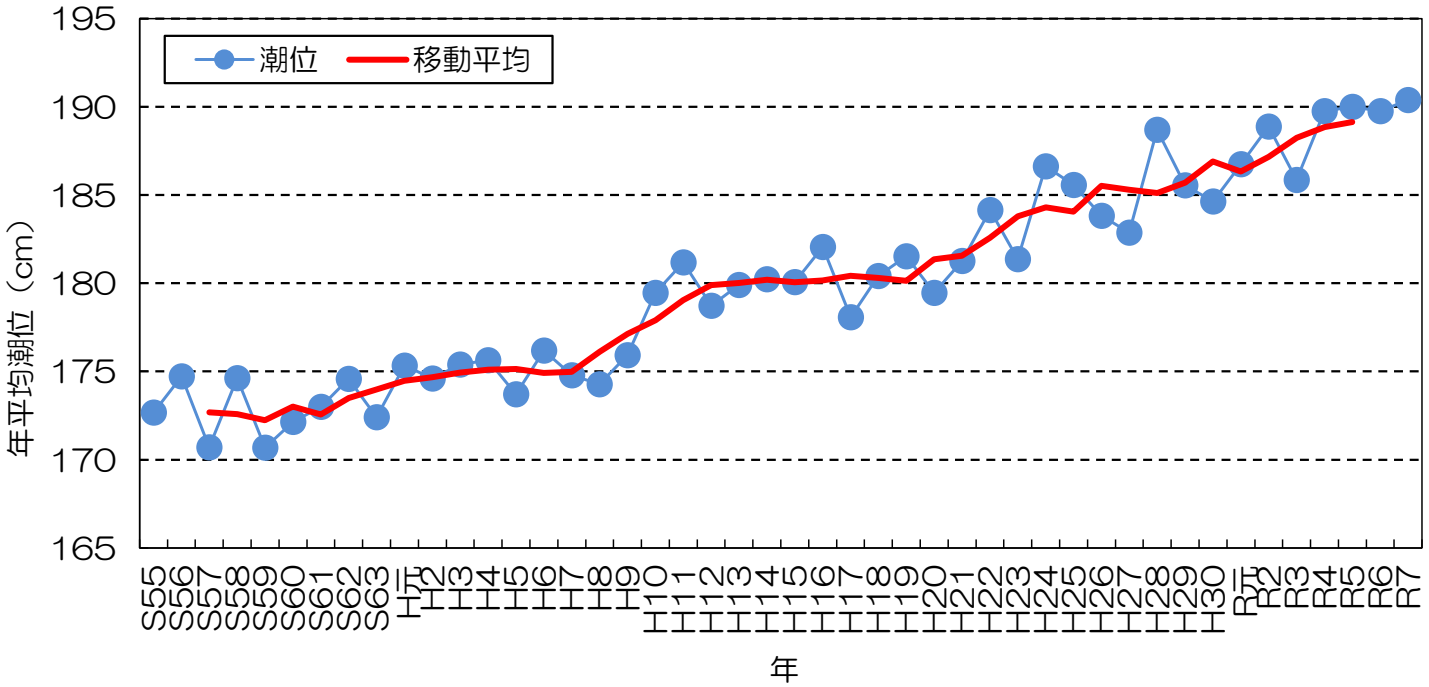
○令和7年度のまもるーむ福岡における博多湾環境保全に関するイベント実施回数は8回であり、参加者数は計163名であった。

（参照：資料2　p87）

その他　地球温暖化の影響等（潮位）

（ア） 潮位

・年平均潮位は、年変動を繰り返しながら上昇傾向（$p<0.01$）にあった。



注1）年平均潮位は時間別値（観測基準面からの値）を年別に平均して求めた。
注2）図中の赤線は5か年の移動平均値（前後2か年のデータを平均化）である。
注3）令和3年は8月1日から10月12日まで欠測となっている。
データの出典）S55～H27年：日本海洋データセンターホームページ
H28～R6年：海上保安庁第七管区海上保安部海洋情報部ホームページ

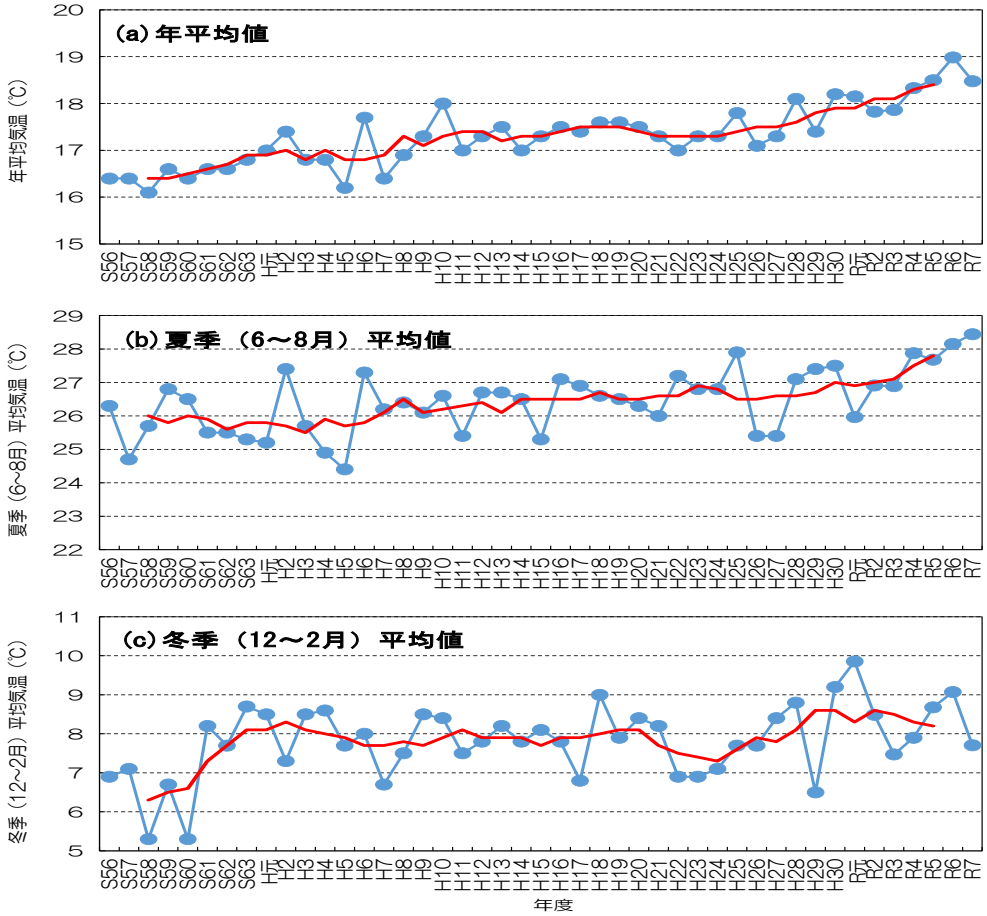
年平均潮位の経年変化（博多験潮所）

（参照：資料2　p89）

その他　地球温暖化の影響等（気温）

（イ） 気温

・年平均気温、夏季及び冬季平均気温は上昇傾向（$p<0.01$）にあった。
・令和7年度の平均気温は、夏季平均が昭和56年度以降で最も高く、年平均が昭和56年度以降で最も高かった令和6年度に次いで高かった。冬季平均が直近10か年の値と同程度であった。



注1）平均気温は日平均気温を年度別に年あるいは夏季・冬季で平均して求めた。
注2）図中の赤線は5か年の移動平均値（前後2か年のデータを平均化）である。
データの出典）福岡管区気象台ホームページ

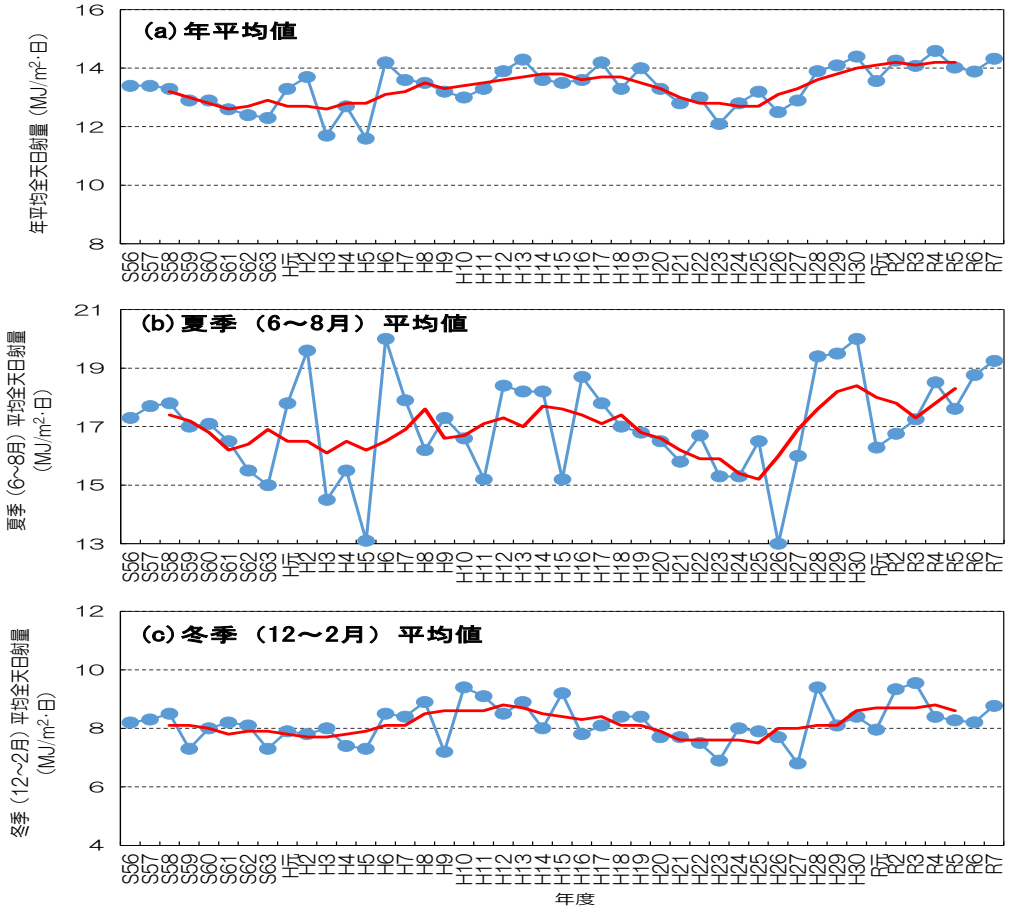
平均気温の経年変化（福岡管区気象台）

（参照：資料2　p90）

その他　地球温暖化の影響等（全天日射量）

（ウ） 全天日射量

・年平均全天日射量は、年変動を繰り返しながら上昇傾向（p<0.01）にあった。夏季、冬季平均全天日射量は、年変動が大きく経年的な上昇傾向はみられていない。
・令和7年度の平均全天日射量は、年平均、夏季平均及び冬季平均ともに直近10か年の値と同程度であった。



注1）平均全天日射量は日平均全天日射量を年度別に年あるいは夏季・冬季で平均して求めた。
注2）図中の赤線は5か年の移動平均値（前後2か年のデータを平均化）である。
データの出典）福岡管区気象台ホームページ

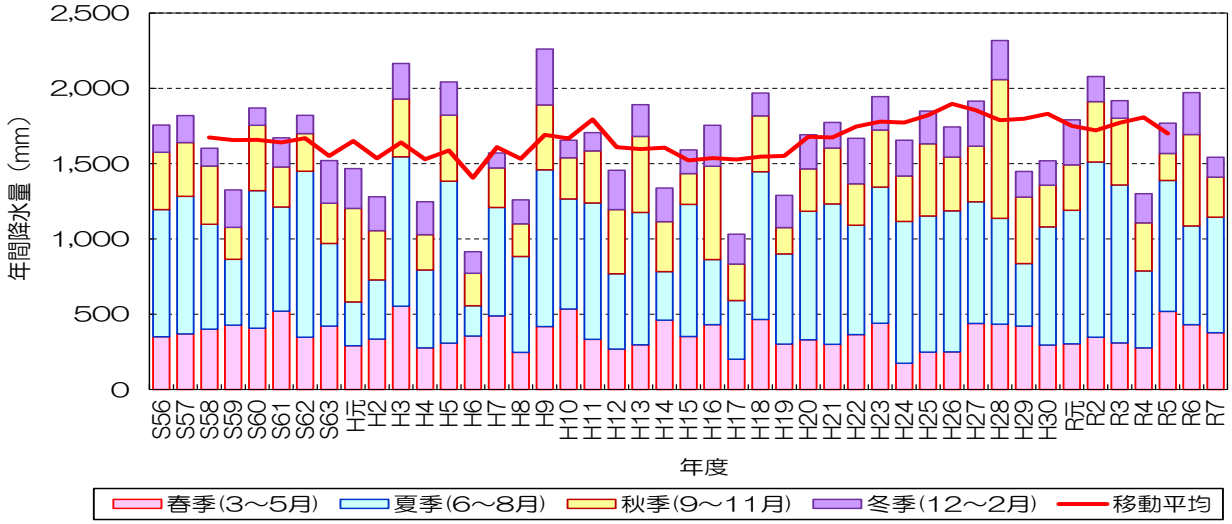
平均全天日射量の経年変化（福岡管区気象台）

（参照：資料2　p91）

地球温暖化の影響等（降水量）・気象の概要

（エ） 降水量

・年間降水量、夏季及び秋季降水量は、年変動を繰り返しながら上昇傾向（p<0.01）、春季降水量は低下傾向（p<0.01）にあった。冬季降水量は経年的な上昇傾向はみられていない
・令和7年度の年間及び春季～冬季の降水量は直近10か年の値と同程度であった。



令和7年度の気象の概要

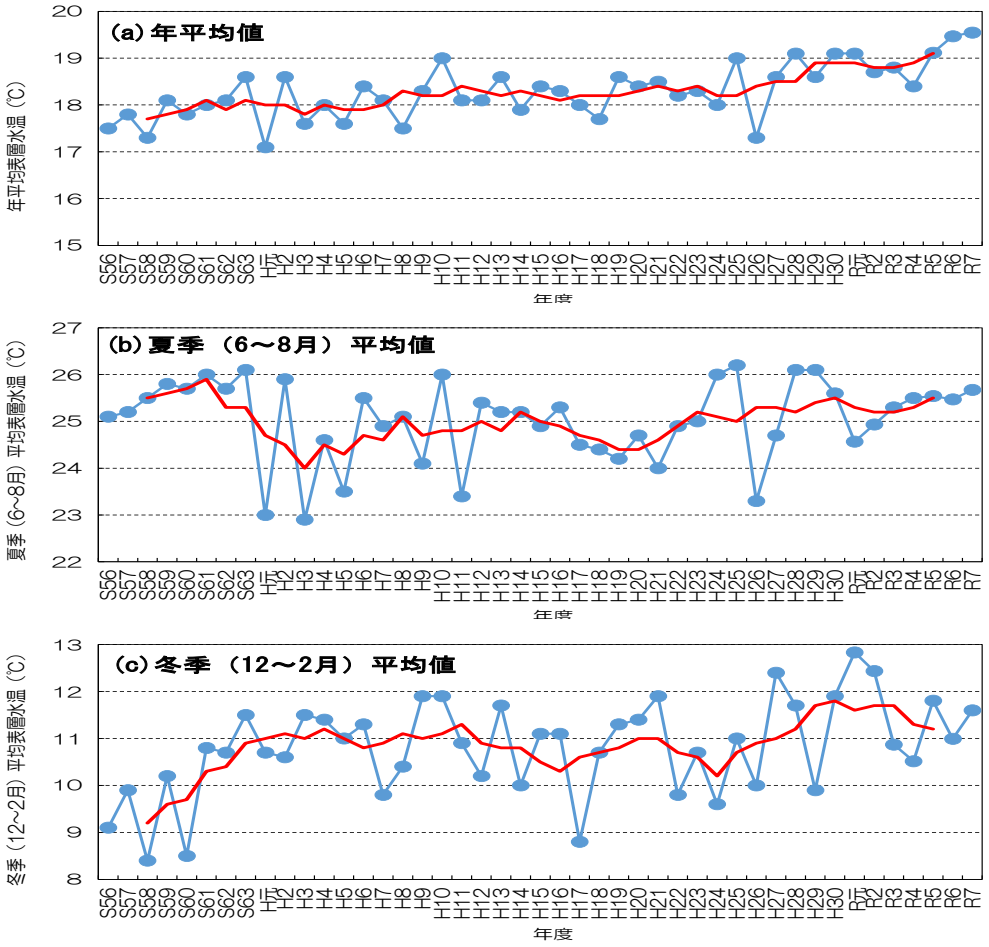
・春（3月～5月）は、北日本を中心に暖かい空気に覆われやすかったため、西日本の気温は高かった。西日本日本海側の降水量と日照時間は平年並みであった。
・夏（6月～8月）は、夏を通じて偏西風が平年より北に偏って流れやすく、暖かい空気に覆われたため、西日本の気温はかなり高く、1946年の統計開始以降、夏として1位の高温となった。また、太平洋高気圧に覆われやすかったため、西日本日本海側の降水量が少なく、日照時間がかなり多かった。
・秋（9月～11月）は、秋の前半を中心に偏西風が平年より北に偏って流れやすく、暖かい空気に覆われやすかったため、気温は全国的にかなり高かった。西日本日本海側の降水量と日照時間は平年並みであった。
・冬（12月～2月）は、暖かい空気に覆われやすく、暖かい空気が流れ込みやすかった時期もあったため、全国的に高かった。一方、寒気の影響を受けた時期もあったため、西日本では気温の変動が大きかった。西日本日本海側の降水量は平年並みであり、日照時間は冬型の気圧配置が長続きせず、高気圧に覆われて晴れの日が多かったためかなり多かった。

（参照：資料2　p92）

その他　地球温暖化の影響等（水温）

（オ） 水温

・年平均表層水温、冬季平均水温は上昇傾向（$p<0.01$）にあった。夏季平均水温は経年的な上昇傾向はみられていない。
・令和7年度の平均表層水温は、年平均が昭和56年度以降で最も高く、夏季及び冬季平均は直近10か年の値と同程度であった。



注1）平均表層水温は月1回の頻度で測定した表層値を年度別に年あるいは夏季・冬季で平均して求めた。
注2）図中の赤線は5か年の移動平均値（前後2か年のデータを平均化）である。

年平均表層水温の経年変化（博多湾内の環境基準点）

（参照：資料2　p93、94）

指標・目標に対する評価の概要

基本的方向	指標・目標		モニタリング調査結果（令和7年度）	評価
ささえる	水質（COD、T-N、T-P）	環境基準達成状況　現状維持 ⇒※H28～R5年度の最低達成率以上 COD　2/8地点 T-N　2/3海域 T-P　全3海域	COD　3/8地点 T-N　2/3海域 T-P　全3海域	現状値と同程度であった
	博多湾海域における魚種数	現状維持　69種	102種	現状値よりも多かった
はぐくむ	博多湾の藻場面積	現状維持　⇒R5博多湾藻場分布調査の面積（419.4ha）	（調査なし）	
	海藻類の種数（志賀島、能古島、今津）	現状維持 ⇒※H28～R5年度の最少種数以上 今　津　54種 能古島　47種 志賀島　54種	今　津　58種 能古島　47種 志賀島　60種	現状値以上であった
	博多湾海域における魚種数（再掲）	現状維持　69種	102種	現状値よりも多かった
	室見川河口干潟のアサリ推定資源量	136トン（福岡市水産業総合計画に定める目標に準ずる）	（5月）10.6トン （11月）89.0トン	目標値を下回った
	一人当たり漁業生産量	8.88トン（福岡市水産業総合計画に定める目標に準ずる）	5.10トン(R6確定値)	目標値を下回った
	ノリ養殖生産量	187トン（福岡市水産業総合計画に定める目標に準ずる）	156トン(R6確定値)	目標値を下回った
ふれあう	ラブアース・クリーンアップ参加者数	現状値より増加　⇒R5年度（41,800人）よりも増加	38,575人	現状値よりもやや少なかった
	百道浜来客者数	現状値より増加　⇒R5年度（300万人）よりも増加	297万人	現状値と同程度であった
	水浴場水質	全地点A以上	（開設前）全地点A以上 （開設中）3/5地点A以上	開設前が全地点A以上、開設中は3/5地点A以上であった
つなぐ	博多湾環境保全創造活動の開催数	現状値より増加　⇒R5年度（31回）よりも増加	36回	現状値よりも多かった
	まもるーむ福岡における博多湾環境保全に関するイベント実施回数及び参加者数	現状値より増加　⇒R5年度（7回及び計148名）よりも増加	8回及び計163名	現状値よりも多かった

（参照：資料2　p48、77、84、88）

課題解決に向けた調査・研究の状況

（1） 博多湾のワカメ、ノリ養殖場の栄養塩について

（調査主体：福岡県水産海洋技術センター）

養殖漁期中（11～3月）に養殖漁場周辺の栄養塩濃度を週1回程度測定し、ワカメ、ノリの生育状況と比較するとともに、漁業者への情報提供及び養殖指導を行った。

（2） 博多湾の水質環境について

（調査主体：福岡県水産海洋技術センター）

博多湾の水質環境の把握のため、4月～3月、湾内6地点で、栄養塩濃度（無機態窒素、無機態リン酸態リン）の分析及び水温、塩分、溶存酸素を測定。

（3） 博多湾の難分解性有機物調査

（調査主体：福岡県水産海洋技術センター）

博多湾の有機汚濁指標としてのCODの妥当性の検証のため、季節毎に年4回（前年度11月、2月に続き5月、8月）、湾内9地点で海水をサンプリングし、恒温器内で16週間の有機物生分解試験を行い、COD減少の推移を把握。

（4） 博多湾における環境DNAを用いた魚類のモニタリング

（調査主体：保健医療局環境科学課）

博多湾における魚類の生息状況を広範囲で把握することを目的に、環境基準点及び沿岸域において環境DNA技術を用いた魚類の網羅的モニタリング調査を実施し、データの比較・解析を行った。

（参照：資料2　p95～106）

課題解決に向けた調査・研究の状況

（5） 魚類相による博多湾のアマモ場等評価

（調査主体：環境局環境調整課）

博多湾、唐津湾、玄界灘のアマモ場の魚類相を把握・比較することにより、博多湾のアマモ場の魚類相の特徴と位置づけを整理し、環境保全創造施策の基礎資料とした。

（6） カブトガニ幼生生息場把握等調査

（調査主体：環境局環境調整課）

カブトガニ幼生が生息する可能性のある今津干潟の場所の把握を行うとともに、市の幼生調査で幼生の生息が確認された地点の底質及び標高等を調査することで、効果的・効率的なカブトガニ調査及びカブトガニ保全施策を検討する際の基礎資料とした。

（7） 博多湾水質の統計解析

（調査主体：環境局環境調整課）

博多湾の水質の統計解析や基礎生産力への影響因子を解析し、博多湾の栄養塩類のあり方検討に向けた水質の現状整理及び基礎資料とした。

（8） 博多湾流域における水循環の検討

（調査主体：環境局環境調整課）

博多湾流域の土地利用や気象状況の変化に伴う水循環の変化を科学的かつ定量的に把握し、博多湾の環境保全に向けた検討の基礎資料とした。

（参照：資料2　p95～106）